

f c t

GAZETTE

1991. 5

vol. 11

Number. 41

ガゼットは
テレビと市民
のデータバンクです

複写（コピー）は
ご遠慮下さい。

編集・発行／FCT（子どものテレビの会・市民のテレビの会）編集委員会 責任者・鈴木みどり

発行所・神奈川県葉山町長柄1601-27 購読料／年間（4回発行）¥2000（送料共）一部¥500（送料別）

第一勧業銀行返子支店（普通預金1425785）郵便振替 東京9-84097

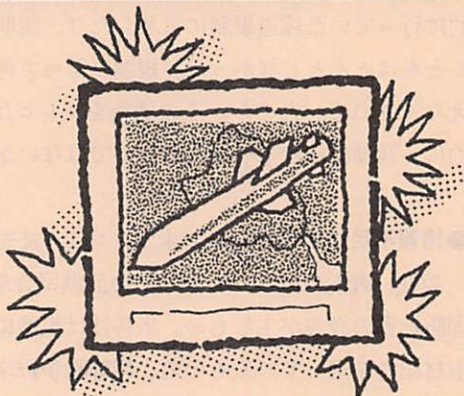
■ 特集

検証・テレビの中の戦争

— 新聞を手がかりに —

誰もが認めるように湾岸戦争は情報戦争で、それは人びどにとって“ニンテンドウ・ウォー”と呼ばれる「テレビの中の戦争」だった。突出していたのは映像として見える部分だったが、その部分でさえ大半はペンタゴンのかすみ網を通して映し出されたものだった。

この戦争報道でテレビが私たちに伝えたものは何か、伝えなかったものは何か。何が映像にならなかったのか。それを検証する手がかりを得ようと、私たちは開戦の1月17日から停戦後の3月16日までの2カ月分の新聞からテレビに言及する記事を切抜く作業を行った。使用したのは朝日、読



売、毎日、日経の主要4紙である。その結果、予想を超える大量の切抜きが集まったが、それを分類した中から本誌では以下の6分野をとり上げ、日付け順に要約して並べ、資料としてまとめてみた（朝・夕刊の区別は夕刊のみ④で示す。日付の後にコラム名があればそれを記した）。

この資料を読む中で、私たちはあのTVイメージの洪水が何であったか、その本質的歪みと限界、見えなかったものは何か、また新聞とテレビの関係など、多くのことを考えさせられる。その議論を読者の投稿に期待し（5月20日〆切）、次号でより積極的に、継続して取り上げる予定である。

■ CONTENTS ■

- 特集 検証・テレビの中の戦争 …………… 1
- 「報道規制」をどう報道したか …………… 2
- CNNとは何かを伝える情報 …………… 4
- 各紙の企画記事にみるテレビ報道分析 …… 6
- 社説及び一面コラムはどう扱ったか ……… 9
- 有識者による「テレビの中の戦争」論評 … 10

- テレビの戦争報道に対する市民の声 ……… 12
- ニューヨークで見た湾岸報道 …………… 14
- FCT データバンク
- 国内篇 …………… 15

イラスト 市川雅美

「報道規制」をどう報道したか

多国籍軍による厳しい報道規制・情報管制（ブラックアウト）の実態をテレビは果してどこまで伝え得ていたか。それを考える資料として各紙の関連記事を切り抜き、以下に要約した。バグダッドからの映像には「検閲済み」の表示が入っていたが、アメリカ軍発表のビデオ映像、プール取材の映像などに報道規制があると表示が入ることは減多になかった。キャスターも多国籍軍側が日常的に行っていた報道規制に言及したり、説明することをほとんどしなかった。規制によって何が見えなくされていたのか。その議論をテレビは日常的に、執拗に続けるべきだったのではないか。

●情報不足にイラ立ちも／米マスコミ（読売 1/22）

現在、戦況はサウジアラビアの前戦司令部と米国防総省の発表が主なもの。米各社は現地に代表取材記者を送っているものの、朝鮮戦争以来という厳しい規制が敷かれ、数字などはなかなか出て来ない。最近の報道は生情報が少ない分、情報筋や軍事専門家の話が多くなっている。

●「規制」と「自由」で火花／湾岸戦争報道の現場と実情／軍が付き添い、検閲／記者側「事実隠し」と批判（朝日 1/28）

情報に対する厳しい管制や情報操作による摩擦が表面化していると、米国、サウジアラビア、イスラエル、イラクから特派員が報告。米国防総省の報道規制は①前線取材は代表記者団（プール）が行い、軍当局者の付き添い必要、②この取材を基にした記事などはすべて前線で検閲されるの2点が大きな柱。26日付W・ポスト紙は報道規制の具体例を特集し批判している。26日CNNテレビの討論番組でも米政府を擁護するキッシンジャー元国務長官をベテラン記者が厳しく批判。

●湾岸戦況発表の“大本営度”（朝日 1/29）

多国籍軍側とイラク側による戦況発表が大きく食い違っていると、17日～27日の10日間の両者発表を比較できるように表で示し、解説。もっとも

差が大きいのは撃墜機数。また「大本営」という言葉を説明し、あの頃日本で連戦連勝と報じられたのが敗戦後に「虚報」と分ったと解説。

●米軍規制、じれる記者団（日経 2/4）

戦況評価にブレも／「成果・損害・速報は敵利す」とサブ見出しをつけて、軍の情報規制に不満を募らせるアメリカのマスコミ各社の動きを報告。

●米英軍が報道規制強化（読売 2/11）

「逮捕や銃の威嚇も」のサブ見出しをつけ、8日付英タイムズ紙の内容を特派員電として紹介。それによるとベトナム戦争の反省から英米両軍当局の締め付けは過剰なまでに強化され、戦争報道への重大な危機をはらんでいる。例としてBBCとITVの取材班の逮捕、ある通信社カメラマンが銃撃すると脅された等を紹介。

●肌で感じた愚かな戦争（毎日 2/13・記者の目）

イラク、イスラエル、ヨルダンの「現場」を回り、ミサイル攻撃を受ける恐怖、戦争の愚かしさを肌で感じた特派員が、「泥沼化へ不吉な予感」（サブ見出し）、フォークランド紛争に酷似して、まさか、まさかの連続、と書く。エルサレムの現地紙ジャーナリストの言葉を引用し、報道規制とTV衛星中継戦争の奇妙さについて述べる：我々がガスマスクをつけシェルターに避難している間に、どこにミサイルが落ち何が起きたかを知るには、軍のあいまいな発表を待つより米国の知人に電話するのが一番だ。彼らはポップコーンをかじりながらCNN実況中継ですべてを知っている。

●宮城悦二郎、報道規制下の湾岸戦争（琉球大学教授、朝日 2/16、私の紙面批評）

「ニンテンドウ・ウォー」とはよく言ったもので被害の見えない、いや被害を見せない戦争報道。映像で映っている部分が鮮烈なだけに、映っていない部分との関係が見えにくい。だから見る側の柔軟な想像力が必要となる。新聞も程度の差こそあれ同様の危険性を持つ。表層的な「客観報道」をする時だ。メディアはいまそのような報道を余

儀なくされている。米軍は片腕を縛られてベトナム戦を戦わされて負けたと言うが、いま片方目かくしされて仕事をさせられているのはジャーナリスト。これは日本の国民にとっても重大問題だ。

●米国防総省に追求厳しく／鋭くたたみかける記者団（朝日 3/15）

米軍のバグダッド空爆で多数の市民に死者が出た事件は記者団との関係を一気に緊張させた。米政府はバグダッドに残る西側記者に批判的だったが、その報道で爆撃の惨状が裏付けられただけに13日の国防総省会見では、記者団が事件の真相を厳しく追求、開戦後最も激しいやりとりとなった。空爆を受けた建物の想像図、バグダッド市街図、米政府の声明（要旨）も共に掲載。

●イラク通信網大半破壊か／多国籍軍は報道規制強化（読売 3/15）

●“見えぬ戦況”募る不安／ブラックアウト／兵士の家族に焦り（読売 3/15）

徹底した報道管制（ブラックアウト）の下、25日午前（日本時間）、地上戦突入から2日目に入った湾岸の戦い。アメリカ国内の報道関係者からは不満が続出、外務省も防衛庁もヤキモキするばかり。猿谷要、東大女教授の「報道の自由と管制は微妙」とのコメント付き。

●「兵士の人命尊重」米が報道封鎖／地上戦開始／一転「見えない戦争」に／米中東軍総司令部、背景説明を中止／記者はブーイング（毎日 3/15）

●サウジが謀略放送（読売 3/15）

「フセインは防空ごうの中、兵士の苦しみなど知らぬ」の見出し付きでサウジ国営放送が地上戦開始直後から始めたイラク軍向け「フセイン大統領打倒」の呼びかけメッセージを紹介。

●湾岸上空からガラリ偵察の目／米軍、スパイ衛星や航空機を駆使／情報収集に大きな役割（朝日 3/15、企画・解説）

イラスト付きで米軍のスパイ衛星やスパイ機を解説し、こうした偵察システムが集めたデータは多国籍軍の作戦計画や爆撃効果の判定に欠かせないと、詳しく説明。

●戦争の最初の犠牲者（毎日 3/15、コラム・道標）

論説室の柴田寛二の署名で厳しい報道規制と取材活動について論評。「戦争が起こると、最初の犠牲者となるのは真実である」と第1次大戦中、アメリカのある政治家が語ったと言うが、今回の戦争は正にその危険が大きい。戦闘のハイテク化と並行する報道のハイテク化で情報はあり余るように見える。しかし情報の多さが真実に近いことを意味するのではない。真実の一部にすぎない。

●いいニュースだけ信じたい／“流浪の民”の願いむなしく（毎日 3/15、連載・砂と炎の戦争と人間）

ヨルダンの首都アンマンから社外記者・小島一夫によるパレスチナ人レポート。アラブ全土のパレスチナ人470万人の一人を取材し、ラジオにかじりついてBBC、イラク国営放送を聞き、その中からイラク優勢のニュースだけを信じ、他はウソだ、アメリカの謀略放送だと受けつけない流浪の民の「生きる知恵」を伝える。

●対マスコミ“検閲戦”、圧勝・米軍（読売 3/15、アンダーカレント）

米軍はイラク軍に圧勝しただけでなくマスコミ相手の「もう一つの戦争」にも勝利したと、徹底管制の実態、国益か報道の自由かをめぐる議論、「規制は現状でよい」と米軍の立場を支持した各種世論調査結果などを紹介して総括。

●捕虜の中尉のけが拷問でなかった（朝日 3/15、同紙 3/15にも関連記事）

4日釈放された多国籍軍捕虜の一人米海軍中尉の顔の傷は拷問によるのではなく墜落時のものだったと米軍筋が明らかに。同中尉は14日の記者会見で「ビデオに映る顔を悪く見せようとして自分の鼻をわざと殴った」と語った。

●一枚の写真（朝日 3/15、窓：論説委員室から）

湾岸戦争で印象に残ったのは砂漠の中をイラク兵捕虜が一行で歩いていく光景を撮った一枚の写真。それは終始、遠景でしか見えなかった戦争を象徴している。軍が記者の行動も記事もほぼ管理し切った今回の戦争。うその報道はなかっただろうが、戦争の真実にどこまで肉薄しえたか。一枚の写真にしか切り取れない真実もある。

（まとめ・鈴木みどり）

CNNとは何かを伝える情報

CNNを抜きに今回の戦争報道を語ることはできない。ピーター・アーネット記者がバグダッドから送り出す映像は日本でもテレビ朝日、NHK等の画面から毎日のように放映された。だが、それだけ活用しながら、日本のテレビはCNNをめぐるアメリカで続いていた賛否両論の激しい議論を視聴者にきちっと伝えることをしなかった（NHK衛星局で一部を知り得ただけ）。何故か。こうしてCNN関連の記事を切抜き、まとめて読んでみると、私たち市民とテレビの間に横たわる距離の大きさを再認識させられる。この距離をどう縮めていくか。果して、縮め得るのか。

●「湾岸」米報道戦／CNNリード（読売⑨ 1/19）

開戦直後からCNNは特別の電話システムを活用して約16時間バグダッドから生放送を続け、視聴率はケーブルTV史上最高で加入者の19.1%を記録。開戦から2時間半後のブッシュ大統領テレビ演説は全局合わせて視聴率史上最高の78.8%。

●「開戦の瞬間」世界に報道・CNN（日経 1/19）

バグダッドから退去勧告を無視して開戦の様相を生中継したCNN取材陣3名をベテラン勢、輝く経歴と写真入りで紹介。

●CNNだけ残った（毎日 1/22）

開戦時の実況中継を高く評価されたCNNだがフセイン大統領に利用されていると批判する声もあり、戦争報道のあり方をめぐって議論始まった。

●注目度アップのCNN（朝日 1/22、メディア縦横）

脚光浴びているCNNの横顔と反響を4枚の写真も使って大きく紹介。日本でも24時間CNNを見たいと日本ケーブルテレビ（JCTV）へ銀行、保険・石油などの企業から申込みが続いている。

●CNNの番組占領に苦情相次ぐ（毎日 1/24）

バーレーン、サウジ等の湾岸諸国でも国営放送がCNNの戦争報道番組を流しっ放しで、新聞各紙に読者からの苦情として子どもに悪影響、子ども番組が犠牲になっている等の声を掲載。

●イラクの情報工作／ミルク工場実は生物兵器工場／米報道官が表明（日経⑨ 1/24）

CNNテレビの報道に対する米・大統領報道官の反論。イラクの宣伝戦に利用されていると批判。

●「湾岸報道」圧倒的リード（読売⑨ 1/24）

記者によるCNN本社（アトランタ）訪問記。昨年8月から湾岸地域に90人の取材陣を配置。イラクからの駐在許可に対して3大ネットワーク等から「イラク側の宣伝に利用されている」との批判あるが、ブッシュ、フセイン両大統領への情報伝達回路として必要との見方もある。CNNは情報戦に自ら参加している側面も持っている。

●CNN「現場」報道めぐり論議（読売 1/28）

CNNアーネット記者のリポートがここ数日、次々に米政府、国防総省から否定され、公正報道か、イラク寄りの偏向報道かをめぐり論議的となっている。議論の焦点はミルク工場爆撃、聖地ナジャク空爆、バグダッド北方の集落空爆。

●イラク、CNNの入国許可（日経 1/27）

NYタイムズによれば、イラク政府はCNNに対し取材チームの入国、衛星に画像伝達する機器の搬入を認めると通知。報道に制約つくのは確実。

●イラク宣伝？報道の鏡？（日経 1/30）

29日付のNYタイムズ記事「バグダッドのCNN・プロパガンダの危険か、報道の精神か」を紹介。イラクがCNN取材陣の入国を許可したのはその仕事ぶりに満足しているからと指摘する一方で、「戦争では情報操作は双方が使える兵器だ」とも述べ、多国籍軍やイスラエルの情報制限の事実も強調。アーネット記者によるフセイン大統領の単独会見が28日に報じられ、米国では議会も交えて戦争報道についての議論が盛り上がり始めた。

●CNN、臨時契約料を加盟社に要請（日経⑨ 2/1）

CNNの報道経費は1月だけで約400万ドル（5億2千8百万円）に上り、契約しているケーブル放送各社に臨時契約料の支払いを要請。これに対してケーブルTV業界は一般に好意的に反応。

●CNNは「サダムの声」か（毎日 $\frac{3}{3}$ ）

バグダッドからのCNN報道をめぐって賛否両論がある。検閲されたCNNの情報に真実は少ない（ワシントン・ポスト）、ホワイトハウスの不快感はおかしい。アーネット記者はバグダッドの言葉を額面通り受け取るなど視聴者に警告している（NYタイムズ）、サダムの手助けをしているだけ（CBS）等。しかし「機会を与えられればどこかの報道機関も同じことをするだろう。誰もいないより二つの目がある方がまし」というCNNの意見に反論は少ない。ア記者の横顔を紹介する囲み記事も。彼の冷静さ、優秀さを強調。

●CNNに爆弾予告（日経 $\textcircled{2}$ $\frac{2}{2}$ ）

爆弾を仕掛けたとの脅迫でCNN職員2,500人が避難。番組も一時中断した。

●CNNへ批判強まる（朝日 $\frac{3}{4}$ ）

米国内のCNN批判が保守派を中心に強まり、12日にはワシントンの報道評論家らが放映中止を求めた。批判の多くは多国籍の攻撃が民間施設にも加えられているとのCNNの報道を問題にしている。米国内に反戦意識を広げかねないと反発して。一方、NYタイムズ紙によれば、イラク政府と取引はないと言ってきたCNNが先週末、衛星回線をイラク政府に利用させたことを認めたという。

●フセインのシンパ!?（日経 $\textcircled{2}$ $\frac{3}{13}$ ）

複数の有力保守派団体の代表が12日記者会見し、「ブッシュ大統領に書簡を送るなどしてCNNのイラク退去を働きかける」と述べる。米議会でもCNN批判が強まり、有力上院議員のシン普森氏が「アーネット記者はサダムのシンパとしか考えられない」とCNNの報道方針を厳しく非難。

●シェルター爆撃放映大モメ（読売 $\frac{2}{15}$ ）

バグダッドの悲惨な現場放映の回数をどうするかでCNN編集局では大もめにもめた、とWポスト紙が伝えているという特派員報告。回数が多すぎるとイラク宣伝になりかねないと自制を心掛けたとターナーCNN副社長は語った。粉ミルク工場爆撃の報道以来、保守派のCNN非難が強まっているため。それでも13日夜にはアーネット記者が現場から「爆弾が堅固なシェルターをバターの

ように切り裂いた」とレポートした。

●CNNを超えられますか（毎日 $\frac{3}{2}$ 、記者席）

「外務省情報よりCNNの方が早い」と幹部自身が認めるほど、湾岸戦争では外務省の情報収集・分析の問題が問われたが、そこで、世界各地の日本大使館から送られる極秘情報を一元管理する情報ビルが必要と、建設計画が始まった。

●「話題の人」の損得勘定は？（毎日 $\frac{3}{13}$ ）

トクした人はブッシュ他5名、ソンした人はフセイン他5名。?マーク（番外）アーネットCNN記者他2名。

●情報の風穴（朝日 $\frac{3}{15}$ 、特派員メモ）

衛星放送受信アンテナ設置を禁じてきたシンガポールだが、湾岸戦争のおかげでCNN放送を1カ月認めた。戦後も継続を求める声強く、検討中。

CNNによれば……

バグダッドから西側では唯一報道を続けたCNNは新聞各社にとっても貴重な情報源だった。しかも新聞によっては、テレビ報道をそのまま記事にする傾向が目立った。箇条書でまとめておく。

- 読売 $\frac{1}{24}$ イラク市民平静に? / 残留のCNN記者伝える
- 読売 $\frac{1}{29}$ イラク大統領・原油放出を示唆 / 「武器」として使用 / CNNと単独会見
- 読売 $\frac{2}{18}$ イラク国内侵攻も / 米国防長官が示唆 / 米CNNテレビとのインタビューで
- 朝日 $\frac{2}{19}$ 湾岸モスクワ会談に関するCNN及び米テレビ各局の内容を伝える
- 日経 $\frac{2}{23}$ CNNが米大統領執務室映す / 窓越しに緊張くっきり
- 読売 $\frac{2}{24}$ CNNが22日行った世論調査によると大統領支持80%越え反戦運動ヒッソリ
- 日経 $\frac{2}{24}$ 夜空にせん光 / バグダッドの施設炎上 / TV画面生々しく（地上戦前夜）
- 朝日 $\frac{3}{4}$ CNNが停戦交渉を中継 / 米主導、会見でもチラリ / サウジ司令官に“指示”
- 朝日 $\frac{3}{4}$ 米国防長官はCNNとのインタビューに「装備いくらか残す」と答えた。

（まとめ・新聞清子）

各紙の企画記事にみるテレビ報道分析

放送記者クラブに所属する記者によって書かれたと思われる各紙の企画記事を中心に、テレビの湾岸報道に関してデータを提供したり分析を試みている記事を集めた。視聴率、日米ネット系列化、同時通訳、CM自粛、局側に寄せられている視聴者の反応など、開戦から停戦までの1カ半月の間、テレビ各局は毎日、火花を散らす報道合戦を続けていたから、いくらでも話題はあった。しかし、こうして集めた各紙の記事を読み返してみると、正直に言って、何とも虚しい気分させられる。詳報より速報をと走り続けて、テレビは果して何を私たちに伝えようとしたのか。ハイテク化するメディアは人間の心から遠くなるばかりだ。

●送れなかったバグダッドの独自映像（朝日⑨ 1/18、メディア・インサイド）

17日午前8時43分、米国のテレビ情報を元にNHKが「湾岸開戦」の国内第一報。数分のうちに他の各局もレギュラー番組を湾岸報道に切り替える。世界中から発信される放送の中で、焦点のバグダッドからの独自映像はなし。取材スタッフがイラクを離れたからだ。各局は周辺の国々に拠点を移し取材・報道を続ける。世界中が一地域の戦争を同時進行で注視する時代。「国際報道」に積極的な姿勢をみせる各局の総合的な実力が試される。その極端な機会が訪れた。

●各局、異例の長時間特番（読売⑨ 1/18、社会面）

多国籍軍のイラクへの攻撃が開始しテレビ各局は一斉に特別報道体制に入った。特にNHKは17日すべての定時番組を休止し、昭和天皇ご逝去時以来の大幅な変更。〈第一報〉NHKが午前8時43分、他局に先がけ第一報を伝えた。〈特番合戦〉民放は番組の変更でCMにも影響でる。〈現地〉バグダッドにいた特派員は人命第一との局側の方針で14日から16日に全員退去〈反響〉特番に関する電話相次ぐ。内容はNHK放送センターによると総合局も2カ国語で放送して欲しい、キャスター

は冷静に、反戦の動きも伝えて、という要望や意見。

●湾岸戦争で威力示す／テレビの「日米ネット」化（毎日⑨ 1/19、新メディア事情）

NHKとABC、TBSとCBS、日本テレビとNBCという日米ネットの威力が試され「衛星の時代」を視聴者に印象づけた湾岸戦争。日米ネットワーク強化の背景にはジャパン・マネーに期待する米側の事情がある。「メディア戦争」の行方も今後、注目される。

●NHKは強かった（読売⑨ 1/23、視聴率の現場）

17日夜「7時のニュース」28.9%は平均の2倍以上。深夜零時までの報道番組の平均視聴率は18.0%で2位のフジ（8.9%）に大きく水をあける。18日以降もこの傾向は変わらない。民放の湾岸関連番組は17日のテレビ朝日「ニュースステーション」が20.9%だったほかは、おおむね低調。17日いつ通常番組に戻すかで、民放各局の特徴が出た。特に目立ったのはフジテレビとテレビ東京。

●テレビで見た湾岸戦争／リアルだけど切迫感薄い／25人に電話アンケート（朝日 1/23、家庭欄）

関西在住の10代から70代の男女25人にテレビの中の戦争をどう見たかを電話で聞いた。開戦をTVで知ったが16人。開戦の日テレビを見た時間は1日中つけっ放し10人、10時間以上2人。テレビの中の戦争について感じたことを整理すると、ゲーム感覚で眺める人は若者に多く、死の実感なく怖いと述べるのは年配者。

●戦争報道もう、うんざり（日経⑨ 1/23）

英BBCの発表によると、開戦後テレビ局に寄せられた苦情は1週間で約1千件（開戦前の1.5倍）。その内容は①娯楽・スポーツ等が見られない、②兵器、戦術など戦闘絡みの情報多すぎる、③番組の急変更は困る等。民放のITV、BBCラジオにも同様の苦情が急増している。

●衛星時代・湾岸戦争・TV奮戦（毎日⑨ 1/24）

衛星放送時代の新体験にテレビはどう対応したか。〈ライブ最長〉NHK総合は開戦第1報から

23時間10分の連続生中継。72年浅間山荘事件中継（10時間40分）の記録を優に塗り替えた。視聴率も他局をリードし開戦当日のゴールデンタイムは20%台を記録。〈回線相場急騰〉安全確保を優先した日本の取材陣は周辺国で取材を行っている。ABCの映像をリアルタイムで受信するためNHKとフジテレビが専用の回線を設置。戦争の長期化で局の負担が増えそう。〈時の人〉脚光を浴びた軍事評論家。〈視聴率〉開戦当日、全日の総世帯視聴率は49.6%（ビデオリサーチ社）通常より5%ほど高い。1%は関東地区で13万世帯に相当する。特番の内容に関しては肯定的な意見が多い。

●湾岸と相乗効果／「京ふたり」41%（読売 $\frac{1}{2}$ 、数字の裏）

NHK朝の連続小説「京ふたり」が19日視聴率41%を記録。湾岸戦争のニュースがこの番組をはさんだ形で放送されたためと同局広報室。

●「見える戦争」報道の新展開（朝日 $\textcircled{4}$ $\frac{1}{25}$ 、メディア・インサイド）

湾岸戦争は戦況の刻々の変化をテレビが茶の間に映し出す「見える戦争」。開戦第一報を米国テレビが当局発表より先に音声実況で伝え、当初はまるで映画かコンピュータゲームかと錯覚させるような報道が続いた。日本政府の90億ドル追加支援の決定に至る動きは生活にひきつけた戦争報道となった。イラク国営テレビ撮影の米・英・伊などの多国籍軍捕虜の映像もときどき始めた。CNNだけが現在もイラク滞在を認められている。日本各局は米3大ネット、CNN、英BBC等に多くを頼っている。特に注意すべきこととしてNHK山香報道局長は「フローとストック」という。視聴率はNHKが圧倒的。民放は19日からNHKは22日頃からはほぼ通常にもどった。

●放送界に自戒の声・テレビの戦争報道（読売 $\frac{1}{27}$ ）

テレビが初めてリアルタイムで放送する湾岸戦争は「ゲーム感覚」で見られてしまう恐れもあると、放送界で自戒の声が出始めた。国民の関心の高まりはテレビの大報道とかなり関係あるが、視聴者から懸念の声も起きている一多国籍軍からの取材が圧倒的に多く情報量に格差がある、地上の

損害や犠牲の映像少ない、軍事評論家の分析がテレビゲームやスポーツの感覚を与えかねない等。こうした点は各局も「生の映像の怖さ、落とし穴」と認め、バランスが大事（NHK）、戦争の意味に重点を置きたい（テレビ朝日）と今後努力すると語っている。民放労連では24日テレビの報道内容を疑問視する緊急声明を出した。

●湾岸に強かったNHKと「久米」（読売 $\frac{1}{4}$ 、数字の窓）

18日以降の主な番組の視聴率をみると、NHKの各番組とニュースステーションに人びとの関心が集中したのがわかる。

●大活躍「同時通訳」のおかしな日本語・ご反応（毎日 $\frac{1}{9}$ 、コトバ新図鑑）

日本語に日本語の通訳がいらそうな「同時通訳」ぶりだったが、その活躍にはほとほと感心した。

●また「自粛」?! テレビCMから「浪費」追放（毎日 $\textcircled{2}$ $\frac{1}{14}$ 、あつと5）

湾岸戦争が長期化の様相をみせる中「時節柄、大量消費や戦争を連想させるCMを自粛しよう」という企業の動きが出始めた。日本石油は具体的な商品の宣伝が一切ない企業CMに変更。昭和シェル石油も企業イメージCMに変える。日本コカコーラは提供番組が湾岸戦争の特別番組に変わる時にはCM提供中止とすると決めた。大塚製菓の巨人軍ナインを使うCMは毎年のグァムから沖縄へロケ場所変更。戦闘シーンが出てくるテレビゲームCMはお断りと決めたのはTBS。

●湾岸終結より先に敗北宣言?（毎日 $\frac{1}{18}$ ）

米国の新聞・テレビが戦争と景気後退で人員整理を考慮せざるを得ない出費増と収入減に直面している。戦争報道の悲惨なイメージのためテレビ広告をしりごみする企業も少なくない。

●「湾岸」報道競う各局／人員・機材やりくり大変（読売 $\textcircled{4}$ $\frac{1}{18}$ ）

NHKの柳沢記者は、第一報を日本語で送ったところ、直後に英語でレポートするよう義務付けられた。取材対象も指定される。情報戦に利用される恐れが大きいと、検閲済みであることを画面に明記するなど、配慮して放送。テレビ朝日は

CNNと機材を貸し借り。NHKは2月より国際部の勤務体制を平常に戻す。民放は系列地方局に応援を求める。各局とも報道にかかる費用に悩む。

●**テレビ報道に批判・戸惑い・映像戦争**（朝日 $\frac{3}{10}$ 、連載・湾岸戦争と日本 23）

開戦日に12時間以上連続してテレビをつけていたのは全世帯の31.5%（その前週は18%）。外務省オペレーションルームでは国内各局とCNNを受信する8台のテレビが24時間つけっ放しになっている。1月22日自民党総務会で戦争とテレビのかかわりが話題になる。山口敏夫「弾圧はできないが、これを修正する情報を国民に提供すべき」佐藤孝行「どの局がどんな番組を流しているか、党の調査局で調べている。」

●**情報不足で編成に苦慮／地上戦突入、その日TV各局は……**（読売 $\frac{2}{25}$ ）

＜第一報＞NHKが最も早い。＜ニュース枠拡大＞米政府が当面の間、記者発表を中止することにしたため、通常番組がほとんど残る。＜現地＞多国籍軍、イラク軍双方とも、従来以上の厳しい報道管制を敷いているため、戦地からの映像は極めて乏しい。＜混乱＞地上戦突入までの3日間は様々な情報が飛び交い、各局とも情報判断に苦しんだ。

●**多国籍軍を追い抜いた／クウェート市にCBS一番乗り**（毎日 $\frac{2}{27}$ ）

米CBSテレビが厳しい報道管制をくぐり抜け軍隊より先にクウェート市内に一番乗り、生中継。CNNの独走が目立つ中CBSの快挙に注目。

●**日米のTV系列化／湾岸報道で鮮明に**（朝日 $\frac{2}{28}$ 、企画・解説）

わが国のテレビ局の映像の核心部分はほとんどが米国製である。湾岸報道で見ると、NHKも民放も米国商業テレビの「核の傘」の中にあることを実証した。日米国のテレビ系列化が強まる中、特にNHKと米ABCの関係が問題になっている。公共放送のNHKが米国の一商業局と組んで、報道番組をそのまま視聴者に提供するのは、図らずも拡大一途のNHK「商業化路線」の一端をのぞかせた。公共放送の本来の姿を追求すべきでは。

●**「湾岸」もう一つの主題／電子メディアが作る架空現実**（毎日 $\frac{1}{28}$ ）

マイクロチップ戦争、メディア戦争と異名をとった湾岸戦争は「電子メディアの中の現実」をめぐるイメージと情報のせめぎあいといえる。ジョン・レノンの「イマジジ」が英BBCや米国のいくつかの州で反戦ソングとして放送自粛や禁止となったが、これはイメージ戦争の性格を象徴している。

●**「湾岸」テレビ報道の問題点は**（毎日 $\frac{2}{28}$ 、ほっとゾーン上）、**大組織の強み見せたNHK**（毎日 $\frac{2}{28}$ 、ほっとゾーン下）

開戦から1カ月半テレビはいかに対応したかを検証する。問題点としては、「テレビゲームのよう」という批判。映像の多くが軍の検閲を受けた米国テレビ局のものだったため「管理された報道」と言われ「日本のテレビチームは何をしている」の声も出た。しかしNHKの柳沢特派員のバグダッド取材、停戦後のJNN原特派員のクウェート取材もあった。各局、衛星回線の確保に苦労した。1日で何千万円という費用でいずれ一般番組に影響出だろう。放送時間が長く、キャスターや解説者が充実していたのはNHK。国内の市民の声の取材は正論を並べるだけで突っ込んだ議論がなかった。日本人全体にアラブ問題の知識が乏しいのも一因。

●**課題残したテレビ「湾岸」報道**（読売 $\frac{3}{29}$ ）

＜提携＞米国三大ネットワークとCNNの力が反映。今後も国際報道で結びつきが強まるのは間違いない。＜同時通訳＞フリーの優秀な通訳はNHKが抑えており、残りの人間を民放で奪い合った。＜規制＞各局は取材規制の中で苦しい報道を強いられた。＜姿勢＞視聴率ではNHKが層の厚みを見せつける。ニュースキャスターの個性の違いを吹き飛ばす、生映像の持つ圧倒的な迫力。

●**「見える戦争」問うTV界**（朝日 $\frac{3}{29}$ 、メディア・インサイド）

情報より速報の競争が1月17日から2月28日の停戦まで続いた。NHKはこの間に計408時間、1日平均9時間半も放送し続けた。取材もハイテク戦といわれ、カメラに加え送信手段も現場に持ち込むことが必要で、CBSのクウェート解放の特ダネもそれで可能になった。日本各局は開戦後にその必要性に気づいた。日米テレビ協力は今後ますます強化の方向にある。（まとめ・佐々木はるひ）

社説及び一面コラムはどう扱ったか

各紙の社説及び1面下のコラムは言ってみれば新聞のオピニオンが展開されている“良心”とも言える部分である。

各紙社説では、毎日のように、戦争にふれているが、その内容については、先頃産経新聞が3紙と自社の社説を「湾岸戦争が日本人に突きつけたもの：社説と評論を検証」（3月14日付け）として特集している。それによると、特に自衛隊機の派遣などで朝日と毎日対読売と産経というはっきりした対立の構図がある、としている。とは言うものの、長時間を費やして報道されたテレビの戦争報道については各紙ともあまり触れていない。

●映像戦争と受け手の想像力（朝日 3/4社説）

映像情報過多の部分では全体の分脈を見つけ解釈を放棄しないこと、映像過小の部分には柔軟な想像力で立ち向かう、そして、より多くの人間が戦争の全体像を把握することが戦争の出口を探すことにつながる、としている。朝日はこの1本のみ。

●情報化時代の戦争と私たち（毎日 3/4社説）

自国民だけではなく、世界の世論を味方につける事もできる情報化時代の戦争は逆に報道管制が必要になるのではないかと、として、戦争映像の背後に何を見るかが私たちの課題、としている。

●湾岸戦争の終結を喜ぶ（毎日 3/4社説）

テレビで見るクウェート市民の歓喜、捕虜になったイラク兵の安堵、「やっとこれで国に帰れる」と語る米兵士の心情を私たちは共有する。

以上3本、いかにも少ない。速報性に於いて、映像のもつ強みに於いてテレビにはかなわない新聞の、あまり触れたくない部分、認めたくない部分として、言及を避けたともとれなくはない。

情緒的な「編集手帳」氏

各紙の1面下、広告のすぐ上には天声人語（朝日）余録（毎日）編集手帳（読売）とそれぞれ社を代表するような書き手を動員したコラムがある。社説とはひと味違ったオピニオンを展開する場

もあり、読者へのインパクトも強い。

●天声人語…死を隠した戦争は私たちの想像力を試している（1/16）、ハイテク戦争は兵器実験のようで見ている吐き気がする（1/22）、実況中継される戦争、胃が痛くなる（2/27）、戦争は終わった、西洋とは違う文明のテレビ紹介に期待しよう、それが国家の壁を低くする（3/1）

●余録…コンピュータ時代の戦争、日本は対米追随外交、言われなくても米の要求がわかる（1/17）、今度の戦争は人間の影がうすい、戦争の真の姿はテレビに描かれない（1/20）、ピンポイント爆撃はブラウン管の中の幻想にすぎなかった、良い戦争、悪い平和というものは存在しない（2/13）、軍事評論家は退場しお笑いタレントが復帰した。のどかで平和な日常がブラウン管を占領する。だが日常の情景がかえって非日常のように映る。いまの日本が虚構に見える。戦争報道に力を入れすぎたテレビのこれが功績か（2/2）

●編集手帳…難民の移送にすら貢献せずテレビを眺めているだけなのか（1/16）、多国籍軍捕虜の姿に背筋が凍った（1/23）、首相のテレビ会見をのぼしたのは醜態、90億ドルについてきちんと説明を（1/25）、テレビが映した鳥のまなざしに戦争という人間の所行への絶望さえ覚えた（1/27）、テレビゲームのような戦争へのやりきれなさについて多くの読者から手紙が寄せられている（1/29）、テレビニュースに釘づけになっているうちに地元住民とのきずなが深まったと在米の友人から報告してきた（2/4）、口先だけの反戦を批判する。反戦というならイラクに対してこそ（2/13）

●よみうり寸評（夕刊）15分も続けるとヘトヘトという。湾岸戦争で活躍しているNHKや民放の同時通訳の人たち、通訳はその国の文化全般について精通しておかなければならない（2/2）

いずれもテレビを通して知った戦争について言及してはいるが、情報に反応しているだけで、踏み込んだ考察はされていない。テレビ報道を読みとって文章化することのむずかしさ、とともにテレビは戦争のなにを伝えたのか、あらためて疑問に思えてくる。（まとめ・竹内希衣子）

有識者による「テレビの中の戦争」論評

新聞各紙が社外の有識者に湾岸戦争について執筆依頼した論評・コラムは多数あったが、その中からテレビ報道に関するものだけを拾ってみると、その数は驚くほど少ない。内容を以下に要約するが、2を例外に大半は単なる印象、感覚的反応を記しているだけ。より本格的で根源的なテレビ論、テレビ批評に日常的に接する機会がないのは視聴者にとって、またテレビの作り手にとっても、不幸なことである。

●榊山紘一、「陽気な戦争」の悲惨・メディアの中の湾岸開戦（東大助教授、毎日⑤ 1/8、文化）

…この“解放感”は恐らくこの戦争の情報環境とも関わりがある。イラク空爆開始から戦局の推移は完全に公開されていたから。アメリカ政府発表はテレビで同時中継される。世界各国からの反響がリアルタイムで集まる。誰もがテレビ画面上で戦争を観察している。天安門とベルリンの壁から政治を報じたテレビが今度は同時性と公開性のもとで湾岸戦争を映し出す。むごい現実を陽気なテレビゲームと誤認する危険をおかしながら、私たちはテレビを見続けるだろう。

●中野翠、私たちはバカである（コラムニスト、朝日④ 1/9、時評'91）

朝9時ごろ目がさめて空爆を知った。映像を見たり解説を聞いているうちにフッと妙にエキサイトしている自分に気がついた。テレビ画面の中に大勝利の軍隊を見ると、映画を見るお気楽さでフットまぶしく見てしまう程に私たちはバカである。

●久田恵、TVの中の戦争（ノンフィクションライター、朝日 1/22、家庭欄コラム）

その日、深夜に家に帰るとテレビの中で戦争が始まっていた。いつか世界中の人が家の中でコーヒーを飲み、ご飯を食べながら戦争の実況中継を見る時代が来るゾ、と冗談のように言われていたが、それが現実となっている。非日常が日常に混入し、見ているこちらも一瞬わけがわからなくな

る。華々しくニュースショー化された画面を見続けていると、つくづく戦争というもののおろかさとその構図がミもフタもなく伝わってくる。

●佐藤陽子、刻々の戦争ニュースにテレビはつけっぱなし（読売 1/22、家庭欄コラム・華ごころ）

17日朝、起きがけにテレビをつけたら、湾岸戦争開始と伝えていた。現在はハイテク時代だから、信じられないほどあらゆるところからの詳しい中継が可能なので、ついテレビにかじりついてしまう。

●林真理子、非常時の底力・湾岸戦争報道のNHK（作家、毎日④ 1/23、文化・映像）

戦争報道はマスコミの集大成だ。各社の日頃の実力や考え方がよくわかる。久米キャスターがどうも軽く見える。NHKの底力を見せつけられたひとつに解説委員の充実がある。平山健太郎委員のアラブに対する知識の深さ、冷静な判断力は感嘆に値する。ゲストの評論家の質も高い。お固く野暮ったいNHKらしさに今回ほど好意を持ったことはない。今も米軍の司令官たちが記者会見をしている。こういうのをリアルタイムで見ると、いま世界でどれほど重要なことが起きているかがよくわかる。これを見、ちらっとリモコンを操作すると、違う局では「混浴温泉旅行死体つき」という番組を流している。これが日本といってしまうえばそれまでだが、やはり不思議な気がする。

●芳村真理、コメントより情報を（テレビ司会者、読売④ 1/24、私のテレビ評）

アメリカから送信されてきた映像のみを編集しコメントで数倍に薄め、特別とするのはあまりに安易。私は百種類のコメントを聞くより一つでも多くの正確な映像と情報が見たい。

●佐藤忠男、連日の戦争報道番組「ただの刺激」を懸念（映画評論家、日経④ 1/25、コラム・タワー）

世界の人々の見守る中で戦争が行われている。作戦自体、国際世論を有利にひきつけるにはどうしたらいいかを考えながら立てられているのは明

白。こうなるとテレビを見ることも単なる野次馬の態度では済まされない。しかし下手をするとテレビゲームのようなただの刺激と興奮で終わってしまいかねない。刺激的な作戦行動の映像が主になり、現地の一般民衆の姿や声はその陰にかくれてしまいやすい。それでは正しい判断は難しい。

●上滝徹也、「気分」を伝える戦争報道（日大教授、朝日④ 1/26、コラム・走査線）

戦争報道を楽しんでいる自分、それを怖いと思っている自分。連日のテレビ報道の前で、この二人の自分がせめぎあっていた。しかし、そんな娯楽気分も諸々の痛みのない映像に加え、あの連日連夜の喜々とした軍事分析を見続ければ、いくらなんでも反省する。そこに戦争を楽しんでいる自分が大寫しにされるから。テレビは一見、現実を伝えているようで、実は「人々が求めているであろう気分」を伝えていることが多い。それを責めようとは思わないが、戦争の愚かさを伝える映像や解説も直視、傾聴したい。

●天野祐吉、戦争と平和、（コラムニスト、朝日 1/26、家庭欄・CM天気図）

戦争とCMは相性が悪い。どんなアホなCMだって戦争に比べればずっと人間的で、ずっとリッパだなァと思えてくる。テレビで戦争のことを話す人たちもあんなウレイをおびた顔でしゃべることはないし、ぼくも「バカだなァ」とか「いやだねえ」とか、もっと素直にあきれるか怒るかした方が、お互い、胃のためにいいと思うよ。

●松尾羊一、両刃の剣「戦争リアルタイム（放送評論家、毎日④ 1/26、サタデーいんたびゅう）

初めは生の迫力に圧倒された。でも爆撃の精度を誇示するようなビデオを見せるあたりから「まるで戦争のパブリシティ」の疑問が出た。どのチャンネルの映像も同じで、非常にコントロールされた報道だ。最低限、映像の出所や検閲の有無などの影響の条件を明らかにし、映像に映らないものについての言及も必要だ。今日、映像が独り歩きし、ナマだからこそ逆に管理される気がする。結局、まだ日本に限らず、リアルタイムで放送を伝える方法論ができていない。現場も迷っている。

●稲増龍夫、湾岸戦争と疑似体験（法政大助教授、毎日 1/27、TVフリートーク）

メディアはその表現技術の発達過程において、残酷な戦争の現実感さえも消費し尽し、今や「現実」の方が「疑似現実」を後追いをするという皮肉な事態が進行している。

●柏木博、電子情報時代・経済戦争と重なる情報戦争／TVで追体験する不気味さ（東京造形大助教授、朝日④ 1/26、連載・湾岸戦争日本の視座から）

人びとがこの戦争を「テレビゲームみたい」だと感じたというが、それは映し出される場面が確かにテレビゲームに似ていることもあるが、同時に兵器も人間も経済コストという抽象的概念に還元して戦っている戦争であるからだ。爆撃用戦闘機のビデオが捉えた画面をそのまま映し出すテレビは実のところテレビゲームどころではなく、ブラウン管はまさに爆撃パイロットの眼差しの追体験なのだ。その点でテレビ画面はきわめて不気味だ。

●中野 翠、私はタフになりたい（朝日④ 1/1）

テレビが何もかも娯楽化ショー化してしまうのはこのメディアの本来的特性であって、不謹慎とか不真面目とか噴いても手の打ちようがない。見る側がテレビに対してもっとスレッカラシになり、複雑でタフな視聴者にならなくてはいけない。

●天野祐吉、TVは反戦CMだった（朝日 1/1、家庭欄）

勇ましい場面を映し出しているテレビは戦争のばかばかしさや正義のいかがわしさを伝えていた。特に大多数の日本人は捕虜の映像を最大の反戦CMと受けとったと思う。ただ活字世代に比べ若者中心のテレビ世代の方が感覚的に成熟している。彼らはテレビで戦争というものを意識の深層で体験した、と期待を込めて言いたい。

●立花 隆、算定の根拠もなく戦費支援おかし（作家、毎日 1/3、連載・湾岸戦争を聞く）

現場からの報道がテレビ映像に偏り過ぎているのは危険だ。映像は検閲済みだから一面的な情報でしかない。カメラが入っていない所で何が起きつつあるかを報道陣、特に活字メディアの記者は伝える必要がある。ところが開戦前に（一度は）バグダッドを全員引き揚げてしまった。日本のマスコミは何を考えているのか。

（まとめ・鈴木みどり）

テレビの戦争報道に対する市民の声

市民の声は大きくわけて3つにくくることが出来る。テレビ報道について街の声として記者がインタビューしたもの、アクションライン（毎日）のように読者からの電話を載せる特設欄といった聞き書きの方法が1つ。テレビ・ラジオ欄の視聴者のテレビ評は、放送さろん（毎日）、はがき通信（朝日）、放送塔（読売）、と各紙にあり、戦争報道への直接的な感想が寄せられている。もう1つは、読者の投書欄で、声（朝日）、みんなの広場（毎日）、気流（読売）、があり別立てのコラムとして激論コーナー（読売）ははじめから対立する意見を並べてある。これらの欄に寄せられた戦争報道についての声は非常に多かった。年齢もはば広く、様々な立場から、多様な意見が寄せられており、市民の関心が深かったことを物語っている。すべてを紹介は出来ないが、内容を大別してみると…

●テレビ報道への直接的意見…開戦以来連続18時間以上放映したNHKに対して890本の電話がかかったが、「苦情はほとんどなかった」（広報室）そうだ。新聞には、●ニュースの関心はどこにあるのか、テレビは戦争が好きなんじゃないかと思ってしまう（気流 1/22、26歳女性、東京）、バック音楽や戦闘場面の映像に効果音を入れてドラマ仕立て、不謹慎で耐え難い心の痛みを感じる（放送塔 1/25、23歳女性、神奈川）、湾岸情勢の解説に外来語が飛び出してわかりにくい。テレビが知識源の初老の我々庶民への配慮を（声 1/11、62歳男性、大阪府）、無責任な言い方をすれば、と断われば何を言ってもよいのか、酒を飲んで戦争を論じるのは許せない（放送塔 3/5、66歳女性、東京）、ニュースアナは常に冷静で私情をはさまずに戦況を語るべきだ（放送塔 3/4、34歳女性、東京）、と圧倒的に批判が多かった。

●テレビ報道を見た感想は投稿欄に多く寄せられ、特に放送時間が長かった開戦初期に自戒を込めて書かれたものがほとんどだった。

ふだんは遅く帰る夫が戦争のテレビを見るため

に早く帰る、戦争ってテレビで見ると面白くない。マスコミも直接的に戦争はやめてというべきだ（アクションライン 1/20、56歳女性、千葉）、だんだん刺激的な画面に慣れてきた自分がこわい（声 1/20、49歳女性、埼玉）、こころなしか戦争を肯定し攻撃する側に立っている自分に驚いた、テレビゲーム感覚なのである（みんなの広場 1/23、37歳女性、青森）、いくら事実でも多すぎると慣れてしまい、いるべき場所を見失う気がする、極力テレビを見ないようにしている（声 3/22、53歳女性、静岡）。

柔軟に反戦活動を展開した市民

●検閲報道について…検閲報道は単なるプロパガンダ、情報本来のありかたをゆがめ、将来に禍根を残す（気流 2/14、58歳男性、千葉）、アメリカのニュースにのみ頼り、日本もアメリカの視点になっていくのも無理はない（声 3/8、41歳女性、山梨）、人命被害を最小限にするために報道管制を強化し検閲をするのは、特殊な状況のなかでは当然（激論コーナー 3/9、59歳男性、埼玉）、人々は真実の報道を通じ、国民の権利と利益を代弁、擁護してくれるマスコミ界を信頼している。イラクの検閲は言論統制の手段で絶対的なもの、アメリカのは戦術情報の提供を制限する管制である（激論コーナー 3/9、63歳男性、山形）。

●市民の反戦の声…長時間テレビを見ながら戦争への疑問が出てこないことに怒りを感じた人も多かった。●反戦の声を反映させることがジャーナリズムの使命、国内の反戦集会の情報を伝えて欲しい（アクションライン 1/17、37歳男性、東京）、テレビを通して世界の人々が平和への議論を出来ないか（アクションライン 1/24、36歳男性、千葉）、おろかなことをはじめってしまったという怒りがテレビから伝わってこない（声 1/30、34歳女性、広島）、いま日本がなにをなすべきか国民的論議を積み重ねることが、放送メディアに課せられた義務では

ないか、推理は必要ない（放送さろん $\frac{3}{4}$ 、59歳男性、東京）、TBSニュース23の反戦歌の特集は好企画だった（はがき通信 $\frac{3}{5}$ 、35歳女性、東京）、投降してきたイラク兵たちの顔がテレビに映し出されたのを、種々の感慨をもって眺めた人たちも多いだろう。兵士から市民の顔に立ち返った人たちのホッとした姿に、私はあの8月15日の自分の姿を見るようであった（気流 $\frac{3}{2}$ 、70歳男性、東京）、NHKスペシャル湾岸全記録は反戦の訴えとしか受け取れず、イラク特派記者は主観的な発言ばかりでイラクに洗脳されたのかと疑いたくなった（放送塔 $\frac{3}{2}$ 、35歳女性、東京）。

こうして毎日テレビを見ているうちに、なにがしかなくてはと居ても立ってもいられなくなった市民たちは、自分の出来ることから意志表示をはじめた。テレビにはこうした部分はほとんど伝えられなかったが、シナリオライターの小山内美江子は昨年11月末から1週間ヨルダンの難民キャンプでボランティア活動をした経験から、自衛隊派遣に反対の意見をアクションラインに寄せている。

山手線の電車内で反戦バッジを売った市民グループ、街頭行動をして反戦を呼びかけたグループ、ハンストに入った瀬戸内晴美、澤地久枝。民間からの支援金で救援の飛行機を飛ばしたキリスト教関係者のめざましい活躍など、新聞は報じているがテレビからは伝わってこなかった。こうしてみると、テレビがいかに市民をとりこまないか、市民の意志を伝えにくいメディアか、あらためてよくわかる。だからこそ、この時期、新聞の投稿欄には実に活発に戦争報道への意見が寄せられたということなのだろう。

子どもたちも戦争について考えた

アメリカでは、1月26日朝通常番組を変更して、ABCとNBCで小、中学生むけに湾岸戦争の解説番組を生放送し、戦争の不安や恐怖心など、悪影響を及ぼさないような配慮を行った（日経 $\frac{1}{20}$ ）。

日本でも、各地の小学校で児童たちと教師が一緒にテレビのニュースを見て戦争について話し合いをした（朝日 $\frac{3}{4}$ 社会面）、「歴史で習った戦争が

まだあったことに、子どもたちは強烈な印象をうけたようだ」などの教師のコメントがレポートされている。「中東戦争を見つめる一戦争・子どもたちの目」としてアンケート調査をもとに大きな紙面をさき意欲的にとりくんでいるのは、毎日（家庭面1月27日～3月7日）家族とともに反戦について語り合うことの大切さをまとめとしている。こうした教育の場での対応があった故もあってのことと思われるが、新聞の投稿欄に幼い子から10代の子どもものものが多く載ったのも、目立った現象と言えるだろう。

●テレビの戦争について若い人の意見を聞くというところに興味をもって見たが、「こっちに被害がなければア、いいと思いまさー」長い語尾に無責任な発言に驚き呆れると同時に怒りがこみあげた（気流 $\frac{1}{23}$ 、18歳女性、群馬）、戦争兵器についてことこまかにしゃべりまくった挙げ句さもりっぱなことを言ったように悦んでいるテレビのなかの評論家たち、ほんとうに大人たちには失望してしまった。私たちにも「あまり愚かなことをしないで」というくらいの権利はある（気流 $\frac{3}{13}$ 、14歳女性、東京）、私はテレビでせんそうを見ました。とてもこわかったです。せんそうはたくさん人の命をうばってしまいます。せんそうはだいきらいやめて（みんなの広場 $\frac{2}{1}$ 、7歳女性、愛知）、アメリカの人のだれもが戦争の行方を心配している。ところが今日の日本語ニュースで、日本では湾岸戦争そのもののテレビゲームが発売され、人気があると書いていた。ぼくは叫びたくなった。家族をのこして戦場にいった人たちのことを思うとそんなゲームなどゆるせないことだと思う（気流 $\frac{3}{13}$ 、13歳男性、在アメリカ）。私たちを惑わせるだけの特別番組でなく、放送日時をきちんと設定し解説・分析など内容の濃いものにしたほうが効果的。繰り返しの情報提供にむやみに番組をつぶすべきではない（放送塔 $\frac{3}{4}$ 、18歳女性、東京）。戦争について、戦争報道のありかたについて、真剣に考えた若者たちが多かったことだけが今回の戦争の唯一の救い、だった。

（まとめ・竹内希衣子）

ニューヨークで見た湾岸報道

竹内紀一郎（早稲田大学4年）

卒業旅行で訪れたニューヨーク、何気なくつけたテレビで、湾岸戦争が地上戦に突入したことを知った。

この4月からテレビ局に勤める私にとって、戦争の当事国であるアメリカのニュース番組は、これ以上望めない教材になる。物見遊山気分もふきとんで、さっそくテレビに没頭することになった。

ところが、全局が一斉に特別ニュース番組を流していたのはせいぜい夜12時まで。それ以後はナイトショー等の通常番組を放送している局もあった。少々拍子抜けしてしまっただが、湾岸報道一色の日本のテレビ局に比べて、当事国であるにも関わらずなんと冷静な対応ぶりが意外だった。

そうした中で、特に目立ったのは、ドキュメント風に兵士達の生活ぶりを紹介するものだった。この傾向は特にローカルニュースにおいては顕著であり、例えば「近所のマイケル」が家族や恋人からの手紙を読み、写真を眺め、あるいはカメラに向かってメッセージを読みあげる。いささかセンチメンタルにすぎるものもあり、それはそれで批判の対象ともなるが、「近所のマイケル」が戦場にいるという臨場感が、見る者に戦争を身近なことと感じさせるのは確かだ。

イラクが撤退を開始した日、CNNニュースのインタビューに一人の女性兵士が登場した。彼女は終戦を喜び、アメリカで待つ家族に「すぐ帰るから」と笑顔でメッセージを送っていた。翌日、ヘリコプターの着地ミスによって、彼女は同僚6人とともに死亡。CNNニュースには悲しみに耐える家族の姿があった。それは、戦争がいかに悲惨でむなしいものか何よりも雄弁に語る映像であった。

もちろんこれらの映像に混ざって、バグダッド空爆、パリオットミサイルの迎撃、ピンポイント爆撃によるイラク軍司令部の爆発など、刺激的な映像も流されていた。アメリカではこの戦争を

「ニンテンドー・ウォー」と表現する人もいたほどなのだが、私の見た限りでは、この「戦争のテレビゲーム化」に対する批判はあまり行われていなかった。むしろ逆に、こうした「強いアメリカ」をアピールする映像が戦意高揚、ひいては91%というブッシュ大統領の高支持率獲得に大きく貢献することになった。

こうしてひたすらテレビを眺めているうちに気づいたことがある。最近日本では何かあると街頭の市民に意見を聞く、いわゆる「街の声」というスタイルがすっかり定着した。これがアメリカのニュースにはまず見られないのだ。戦争についての意見なり予測なりを画面で述べるのは、常に軍・政府の関係者や、専門家であった。そのことの是非はともかくとして、「まあ、いいんじゃないですか」とごまかしたり、したり顔で受け売りの一般論をクドクドと述べたりする人々が画面に登場することは、私の見たところ一度もなかった。

CNN見学できず

今回、私がアメリカを訪れた目的のひとつには、アトランタに本社を構えるCNNを見学するということがあった。CNNはふだん観光客向けに45分間のスタジオツアーを行っている。しかし私は事前に日本から手紙を書いて、もし可能ならそのツアー以上にいろいろと見せてほしい旨を伝えておいた。その返事が待てど暮らせど来ないので、ついにしびれを切らして本社まで乗り込んでいったわけだ。(後で聞いたところによると、この時期CNNには毎日世界中から2000通をはるかに超える投書が送られてきており、とてもひとつひとつ対応できる状況ではなかったそうだ)思ったよりいねいに対応してくれるPR担当者につけあわずいぶん粘ったのだが、やはり地上戦の開始直後、胸にIDカードをつけた社員さえもがかなり嚴重に出入りをチェックされており、一般のスタジオツアーも中止されている状況では、見学がかなえられるはずもなかった。とにかくその異常なまでの警戒ぶりに、改めて今回の戦争でCNNの果たした役割の大きさに気づかされたのであった。

FCT データ・バンク

— 国内篇 —

●総特集「湾岸」報道の嵐、「総合ジャーナリズム研究」No.136、1991年春。

「戦争と同時進行で内外マスコミ動向をチェック、資料収集と整理に明け暮れ」（編集後記）、その第1弾としてまとめられた特集。

小田実・ミサイルの行くえと「湾岸戦争」報道、鳥越俊太郎・そこに日本人ジャーナリストはいたか、岡村黎明・グローバル・メディアCNNの功罪、池本春樹・テレビを使うもうひとつの戦闘、柴田寛二・多国籍記者団と「最も報道の少ない日」。

以上の5論文に加え、細かいデータを丹念に集め、整理した特別資料編も。その内容は①開戦第一報と報道管制、②戦下のCNN、批判のなかで（バグダッド発情報への賛否両論）、③他国の戦争!?日本の報道（テレビで視た、新聞は追った）、④湾岸戦争ジャーナリズムの軌跡（主役はアメリカ情報）、⑤ラジオ、⑥広告自粛。

論文の中ではフェインと「大日本帝国」、「湾岸戦争」と「太平洋戦争」の類似性を指摘、解説する小田実執筆のものが明解で示唆に富む。(M)

●大特集・放送と憲法九条、「放送批評」No.260、1991年3月号。

編集委員会の顔ぶれを一新した同誌（委員長・清水英夫）が意欲的に組んだ特集。座談会・ジャーナリズムなら「憲法」を愛そう（清水、岡本愛彦他）、奥平康弘・テレビにたりない憲法論争、前田哲男・やめよう自衛隊アレルギー、江川紹子・派兵反対にがんばったヤング誌、森口裕・平和こそ最大の福祉である。(M)

●マス・コミュニケーションの調査研究法、鈴木裕久、創風社、1990年11月刊。

調査方法に関する本という従来は、統計処理の方法に記述の多くがあてられ、企画や立案の際の基本的な物の考え方、調査枠組みの設定、質問紙作成の具体的な手続き等の記述の比重が軽かった。これに対して本書は、調査というものをより広い視野からとらえ、何を、いかにして明らかにしようとするのか、その場合に実際の作業をどう進めるべきかを初学者にもわかりやすく説明している。

マス・コミュニケーションの研究において、実証的な研究が盛んに行われ、市民グループも自らの手で調査を企画、立案、実施する時代になって、極めて実用的な示唆に富んだ書である。特に、内容分析や、接触、知覚、心理・行動実態等を問題とする受容過程の調査について、単に概念的な説明ばかりでなく、調査の具体的な事例を各所に挿入してあるため、理解しやすい。好適の入門書である。(I)

●ニュース帝国の苦悩——CBSに

何が起ったか、ピーター・ボイヤー、TBSブリタニカ、1990年12月刊。

アメリカの三大ネットワークの中でも、ウォルター・クロンカイトからダン・ラザーという名キャスターが輩出した「イブニング・ニュース」を看板番組とするCBSは、ニュースに大きな変革をもたらした代表的なテレビ局である。ABCとNBCそしてCBSテレビは、おもにニュース番組のスタッフをめぐる激しい引きぬき戦を展開し、ニュース番組の視聴率争いにしのぎを削っているところへ、後発のCNNがアトラントを本拠にして、24時間の速報ニュース体制を発足させる。

バン・ソーター社長の率いるCBSは、買収の危機にさらされ、あらたに発足させた「モーニングニュース」も視聴率があがらず、次第に危機的状況に落ちこんでいく。「ニュースにおいて映像の編集にはすばら

しいものがあるが、それに頼りすぎていて伝えようとする意味は不明瞭となり原稿は気取り過ぎて未熟であり、全体に番組づくりが粗末である。とクロンカイト時代から引きついで来たものが失われたCBSニュースについて、マスコミ研究家マイケル・マッシングが述べているように、ニュース帝国の危機的状況を詳しくレポートしている。それにしても、これだけ具体的かつ直接的にテレビ局内の組織及び人間関係を描いた本が出来る国が羨ましい。(T)

●図説 ニュー・メディアと子ども、日本女子社会教育会編、1991年3月刊。

総理府広報室、文部省、総務庁、東京都、NHK等が実施した18の調査をもとに、子どもを取り巻くニュー・メディアの実態をデータの上で明らかにしようとした小冊子。日本女子社会教育会が主催した研究委員会の成果である。

子どもの生活と意識、子どもの持ち物、子どもと遊び、子どもとテレビ・ゲーム、子どものメディア接触、学校教育とニュー・メディア、家庭教育とニュー・メディア、などの各章でそれぞれ調査結果が示されている。目立つのは、睡眠時間の減少、高いハイテク製品の所有率、他の国と比較すると少ない「家族でのおしゃべり」、男の子に多いテレビ・ゲーム遊び、マンガ接触率の高さ等々が指摘されている。

これらの各章の後に各研究委員のコメントが付されている。そこで共通に指摘されているのは、ニュー・メディアを過大に評価し、その機能を頭から信奉することの危険性である。メディアを利用するのはあくまでも人間であり、各人の主体性がある初めて、メディアは望ましい方向に機能する。子どもを無用な情報洪水にさらさないために、子どもの情報環境の実態には常にチェックが必要である。(I)

●人権とシェイプ・アップ番組、加藤春恵子(連載・メディアスコープ3)、「マスコミ市民」№271、1991年4月号。

NHK総合局で毎朝、長年放送されている番組「さわやかシェイプアップ」を取り上げ、その問題点を人権の視点で分析する。

まずタイトルからして「肥満は不可、スマートなのは可」というのだから、人権尊重の立場からいって、ひっかかる。次いで、軽やかなリズムによって水着風のユニフォームを着た数人のスタイルのよい若い女性が広々としたスタジオで踊る、という画面。この画面から感得される沈黙のメッセージとは、若い美しい女性こそヘルシーで、そうありたいと願うことこそ「正常」だという価値観である。このようなかたちで画一的な「美」や「健康」のイメージを流布させ、人びとの意識の中にすり込んでいくのは、女性・老人・障害者・病気などの人権を大切に保障する社会をつくる営みとは相容れないし、NHKという公共放送に期待されていることではない。(M)

●キーワードは「クリティカル」、鈴木みどり(同連載2)「マスコミ市民」№270、1991年3月号。

メディアの使い手の権利を守り、確立をめざす上で情報をクリティカルに受けとめることが基本と述べ、その具体的方法を日本と香港のCM比較などで示す。(F)

●日本の子育て・世界の子育て—日仏アンケート調査から、日仏女性資料センター、1990年10月。

6年にわたって日仏国際比較を

ぞしたプロジェクトチームが中心になってアンケート調査を実施した報告書である。1986年に日本で430、仏で338の回答を得て計768のサンプルによったもので、例えば幼児の離乳食について、躰について、体罰についてなど、具体的に日仏比較を行っている。テレビについては、子どもの選ぶ番組を見たいだけ見せるのは仏3.5%、日本は11.4%。1日に見る時間を決めて守らせているのは、仏10.3%、日本47.3%。親が子どもの見る番組を決めるのは仏40.2%、日本9.7%。見すぎないように注意する親は、仏49.8%、日本53.9%。子どものためにならない番組を見せないように気をつける親は、仏37.3%、日本31.1%、一切見せないのは日、仏ともに1%。つまり日本の親は子どもの見る番組の内容にはあまり立ち入らないが、仏では内容に対しても介入する。またクロス集計によれば、日仏ともに高学歴・高収入層には介入的な家庭がやや多く、お話をよく読んでやる母親はテレビ視聴への介入度が高い。読書の習慣づけとテレビ視聴のコントロールとは関連がありそうである、としている。約100頁の報告書を読むと、家庭教育について、子どもという存在の受けとめ方について、日仏の違いが面白い。問合せは「わいふ」(TEL 3260-4771)(T)

●連載・テレビと子ども—コマーシャル時間の制限、石川旺、「はらっぱ」(月刊)、1991年1月号。

「はらっぱ」は大阪の乳幼児発達研究所が発行する保育問題月刊誌。同誌の連載「テレビと子ども」では

1月号で昨年アメリカ議会で可決された「1990年子どもテレビ法案」を取り上げている。この法案は子ども向け番組のCM量が多すぎるとして、その量を平日は1時間に12分まで、週末は10分30秒に制限するもの。それが可決されたことで、市民グループのACTなどは長年の主張がやっと認められたと胸をはっている。

しかし、実のところ、このCM量は日本の現状とほぼ同じであり、決して喜べるようなものではない。むしろ、アメリカにしる日本にしるCM量の多さは異状である。(H)

●市民とともに—組合結成10周年記念、民放労連KBS近畿放送労働組合編、1991年3月刊。

京都KBS(U局)労働組合は地域の市民と共に放送を創り、放送に市民のアクセスを実現しようとする高い理念を掲げて、さまざまな貴重な試みを積み重ねてきた。その活動の一端を本誌でも松田浩氏が紹介したことがあるが(ガゼット№33)、「市民のためのKBSをめざす実行委員会」というバックアップする市民組織もあって、松田氏をはじめ京都在住の多くの大学教授や市民が放送労働者と共に歩んできた10年の歴史であった。この10年の歩みを総括し、より一層の発展を期してまとめられた記念誌である。

10年を振り返る座談会、各支部からの報告、年表・資料に加え、全国から79人の市民が励まし、期待、連帯の呼びかけ等々の声を寄せている。問合せ：京都市上京区烏丸上長者町KBS京都内KBS労働組合。(M)

FCT(子どものテレビの会・市民のテレビの会)はテレビの作り手、視聴者、研究者が立場を超えて集い、より良いテレビの実現をめざして実証的研究と実践活動を積み重ねていくためのひろば=フォーラムとして1977年10月に創設されました。その運営は創設以来、事務局スタッフ及び会員のボランティア、全国の会員からの会費とカンパ、定例のFCTフォーラム(公開の研究会)参加費、および調査研究報告書や季刊情報誌fct GAZETTE(ガゼット)等のオリジナル出版物販布からの収入によって行われています。

「ガゼット」の年間購読のお申し込み、バックナンバーのお問い合わせ、FCT出版物や入会などについてのお問い合わせは事務局へハガキまたは電話(03・3721・8694)でどうぞ。